

小野寺 涼子

オウル大学教員養成学部博士後期課程

認知症介護における物語の構築過程：フィンランドと日本の作業療法場面における比較調査

本研究では、日本とフィンランドの作業療法場面において観察と面接調査を実施し、(1)認知症高齢者と作業療法士は、どのようなナラティブを構築しているか、(2)作業療法士は、どのように認知症高齢者のナラティブ生成を援助しているか、(3)ナラティブの成立にはどのような社会的文化的要因が影響しているか、について質的に分析した。結果として両国の作業療法士たちは、作業療法時や施設あるいは社会適応において求められる課題の遂行に向けて様々な形式のナラティブを組織しており、認知症高齢者も作業療法士の援助を受けながら、協働的にナラティブ構築に参加し、課題を達成する傾向にあった。またナラティブ内で「自身に対する私」、 「他者に対する私」、 「私に対する他者」という3種の認知症高齢者の自己が観察され、作業療法士によるポジティブな自己の創出は、認知症高齢者が他者の視点を理解し、社会的に適切な活動の学習へつながることが示唆された。